

アメリカに住む「新一世」

—米国ロサンゼルス of 長期滞在者に関する一考察—

Shin-Issei in America

—A Study of Post-war Japanese Immigrants in Los Angeles—

越山 泰子*

Yasuko KOSHIYAMA

抄録

本稿は、戦後アメリカに移住し長期滞在している、いわゆる「新一世」の文化的、社会的意識や社会との関わり方について調査したものである。調査の結果、「新一世」は、アメリカの地にあっても日本社会とその文化の影響の中で生活している場合が多かった。また、全般的にアメリカには肯定的、日本に対しては否定的な印象を持ちながらも、日本人であることには誇りを持っていた。

情報網や交通の発達でアメリカが時間的にも心理的にも近くなったせいか、ロサンゼルス of 「新一世」は、「メインストリーム」と言われるアメリカ社会の中心的部分には溶け込むというよりは、日本人としての価値観や生活様式を保ちながらアメリカの自由さを満喫するという、二つの社会をうまく融合させる生き方を選択していると思われる。「新一世」 of アメリカ社会への溶け込み方は、異文化に急激に遭遇した戦前の「一世」と比べて、注意深く「ろ過」された緩慢なものであるようだ。

Abstract

With a great advancement of Japanese economy and technology, a new wave of U.S. immigration by Japanese called *Shin-Issei* (new first-generation) rushed ashore after the 1970's. This study is a preliminary study on the acculturation of *Shin-Isseis* in the Greater Los Angeles area by individual telephone interviews. The subjects are 50 Japanese immigrants (20 years of age or older) who were born in Japan and moved to the U.S. as adults (18 years or older).

Based on the results, the following characteristics concerning the cultural assimilation of *Shin-Isseis* in Los Angeles were drawn: 1) They are not fully assimilated into the U.S. society, living mostly within their own social and cultural boundaries. 2) They tend to have favorable impressions and opinions on various issues related to the U.S. 3) They have unfavorable impressions and opinions on various issues related to Japan, but are proud of their

* 関西国際大学教育学部

Japanese ethnicity and maintain ties with their culture and people by actively using informational media and transportation.

Despite the fact that these recent comers are surrounded by first-hand American culture with less language barriers compared to those of *Issei* (the pre-war immigrants), their acculturation patterns to American culture is rather second-handed. Namely, their process of acculturation to the U.S. is carefully filtered through their pre-immigration cultural identity unlike *Issei* who had gone through more abrupt acculturation processes.

1. はじめに

本稿は、アメリカ合衆国のカリフォルニア州ロサンゼルス近辺に長期滞在している日本人の文化的、社会的意識や社会との関わり方を調査したものである。調査対象は、1970年以降アメリカに渡った日本からの移住者で、長期滞在（3か月以上）のビザの保有者、永住権保持者、米国市民権保持者が含まれる。彼らのように戦後に渡米し長期滞在している邦人は、戦前にアメリカに移民した「一世」に対して、「新一世」と呼ばれている。

外務省が発表した海外在留邦人数調査統計（2008）によると、2007年に北米に長期に渡って在住している邦人は422,116人で、そのうちアメリカ合衆国に在住しているのは374,732人である。北米に在住している邦人の数は女性が235,547人、男性が186,569人と女性の数がかなり上回っているが、これはいわゆる戦前の「一世」と呼ばれる日本人移民の間では男性が圧倒的に多かったのと対照的である（田中、2002）¹⁾。

Takahashi (1998) は、19世紀から20世紀前半に渡米した「一世」や「二世」はアメリカ社会に溶け込むことをより理想的としていたのに対して、「新一世」は日本とのかかわりをより重要視していると述べている。また、Tsukuda (2005) は、アメリカで生まれ育った日系人と日本人の間には見えない文化的、社会的境界線があるともしている。

今回の調査は、日本人長期滞在者50名へのインタビューを通して、米国ロサンゼルスに暮らす「新一世」が米国でどのような意識を持って暮らし、社会と関わっているかを調査するものである。

2. 調査対象, 調査方法

本調査の調査対象は、アメリカのカリフォルニア州ロサンゼルスとその周辺に在住している、日本生まれの20歳以上で、18歳を過ぎてからアメリカに移住した「新一世」50人である。長期滞在ビザや永住権を保有している日本人と、日本国籍からアメリカ合衆国国籍に帰化した米国市民権保持者が含まれる。

調査対象者の抽出法は、調査を行うにあたって先に選ばれた回答者に対して次の回答者を紹介してもらう「スノーボールサンプリング法」を用いた。内訳は、男性25名、女性25名である。平均滞米期間は、18.6年（男性19.6年、女性17.5年）であった。

対象者には前もってアポを取り、電話でインタビューを行った。電話インタビューでは、下記のように（1）対象者の人物的情報、（2）個人的、及び社会的選択、行動内容、興味、（3）日本とアメリカに対する意見や感情、の3つの分野について質問した。

(1) 人物的情報

アメリカでの滞在期間と滞在の理由、婚姻、職業、市民権など

(2) 個人的、社会的選択、行動内容、興味

友人関係、使用する言語、メディア・情報収集の方法、日本訪問など

(3) 日本とアメリカに対する意見、感情

政治、経済、自然・環境、教育、衣食住などのライフスタイル、購買製品、国民性、文化、日本・アメリカとの心理的距離、民族意識など

インタビュー所要時間は15分～20分で、言語は日本語が使用された。比較対象とするために、20歳以上で、アメリカに3か月以上の滞在したことのない日本在住の日本人30名（男性15名、女性15名）にもインタビューを行った²⁾。

3. 結果とその分析

(1) 対象者の人物情報

前述したように、今回調査の対象となったいわゆる「新一世」の滞米期間は、18.6年（男性19.6年、女性17.5年）で、そのうち33名（66%）は既婚（男性17名、女性16名）、17名（34%）（男性8名、女性9名）は未婚であった。既婚者の33名のうち、24名（男性12名、女性12名）は日本人あるいは日系と結婚、9名（男性4名、女性5名）は日本人以外と結婚しているという回答であった。

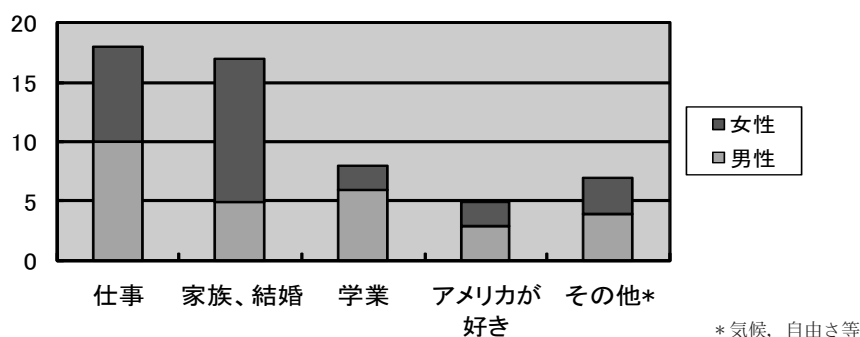


図1 アメリカ滞在の理由（人数）

渡米の理由としては、50人中18名（36%）（女性8名）が「仕事」、17名（34%）（女性13名）は「家族」でもっとも多い回答であった。もともと留学生として渡米して、卒業後もそのまま滞在している回答者もいて、回答時には50名中36名（72%）がアメリカで就労していた。ハワイの日系人社会の特徴として、東（2006）は、戦前の日系一世は多くが出稼ぎ労働者とその家族で組織的な移住が多いのに対して、新一世は仕事、結婚、留学、商業を目的とする個人ベースの移住が多いとしているが、今回の調査でもその傾向は表れている。

仕事を持つ人の就労先は24名が日系企業、4名が非日系企業、8人が自由業であった。Hosler

(1998) では、マーケットなどの自由業者の移民は同じ人種、民族の客層を持つことが多く、アメリカ社会に同化することがより少ないと報告しているが、今回の調査でも21名が、日本人、日系人の同僚、顧客が多いと回答したのに比べて、わずか5名が非日系の同僚、顧客がほとんどであると答えた。

国籍に関しては、4名(8%)のみが米国市民権を取得し、46人(92%)が日本国籍のままという結果であった。(そのうち2名は、市民権取得の手続き中であった。)しかし、「アメリカに永住するつもりですか」という問いに対して、36名が「はい」、 「多分」3名、「分からない」8名、3名のみが「いいえ」と答えた。米国市民権を取得しない理由は、次のようであった。

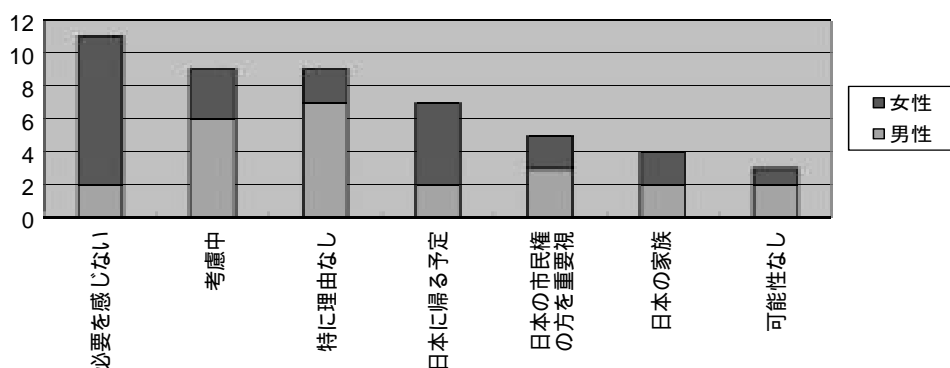


図2 米国長期滞在者がアメリカ市民権を取得しない理由(人数)

「新一世」にとってアメリカ永住の意思はあっても、米国市民権の獲得はさほど重要視されていないことが推察される。

(2) 個人的選択, 行動内容, 興味

本調査の「新一世」の交友関係を見ると、33名(66%)が「日本人の方が多い」、8名(16%)が「日本人とアメリカ人の半々」、4名(8%)が「アメリカ人の方が多い」で、3名(6%)が「友人なし」であった。日本人同士で友人関係を築くケースも多い反面、中には海外の地において「日本的な付き合いを好まないから、アメリカにいる」と日本人との関係を疎んじている場合もあった。

使用する言語については、英語圏に生活する以上日本語、英語両言語の使用は見られるものの、33名(66%)が「日本語をよく使う」、12名(24%)が「日本語と英語の半々」、3名(6%)が「ほとんど英語」であった。Tsukuda (2005) は、日本人と日系人を区別するのは国籍ではなく頻繁に使用する言語であるとしているが、今回の調査では、33名(66%)が日本人と結婚し、24名(48%)が日系企業で働いているということから、「日本語の方がよく使う」という回答は自然である。日本語の文に英語をとところどころ入れたり、「けんじ」を「ケン」、「まこと」を「マック」など日本人名を英語風に変えて使っていることもよくあるようだ。

しかし、本調査の「新一世」の多くがアメリカでも日本語を頻繁に使用しているものの、日本に住んでいる日本人と比較するとやはり英語力には自信をもっているようである。「自分の英語

力は自己評価でどのくらいだと思いますか」という問いに対して、日本在住の日本人の間では、30名中わずか2名（6.7%）が「英語力に自信あり」と回答したのに対し、50名中12名（24%）の「新一世」が「自信あり」と評価している。

情報収集とメディアに関しては、50名中41名（82%）が、日本語の新聞、雑誌を読んだり、日本語のテレビを見たりすると答えた。36名（72%）が、インターネットも大切な情報源であると答えた。またアメリカでも、日本の音楽、ファッション、ゲーム、アニメなどが高く評価されている最近では、日本の流行や製品に関する情報は「新一世」にとっても重要であるようだ。対照的に、13名（26%）がアメリカの新聞、テレビが重要な情報源であると答えたが、その利用法としては「ビジネス」「英語力向上のため」と日本語の情報源の利用法とは異なっていた。

日本への訪問回数は、「毎年」が33名（66%）、「2年に一回」3名（6%）、「3年に一回」3名（6%）、「4年に一回」3名（6%）と、84%が少なくとも4年に一回は日本を訪問していた。また、逆に親戚や友人など、日本からの訪問者を受け入れる場合も多いようであった。この場合、ロサンゼルスは車での移動が中心であり、日本からの訪問者は観光地に次々案内することを期待するなど依存度が高く、過大なストレスを生じるという意見も多く聞かれた。

（3）日本とアメリカに対する意見

インタビューの際、「アメリカはどんな国ですか。一言で言ってください。」という質問を行なった。その結果を頻度の多い順に並べると次のようであった。（複数回答のため、回答合計は総人数の50以上である。）

（男性の回答）

- ① 可能性のある国 6名（12%）
- ② 自由の国 4名（8%）
- ③ 興味深い国 3名（6%）
- ④ 住みやすい国 3名（6%）
- ⑤ 大きい国 2名（4%）
- ⑥ その他（多民族国家、複雑、豊か、楽天的など）7名（14%）

（女性の回答）

- ① 住みやすい国 6名（12%）
- ② 住んでいる国 5名（10%）
- ③ 自由の国 3名（6%）
- ④ 多民族国家 3名（6%）
- ⑤ 可能性のある国 2名（4%）
- ⑥ 大きい国 2名（4%）
- ⑦ その他（難しい、煙草を吸わない、気を遣わない） 3名（6%）

今回の調査結果では、全体的に肯定的な回答が多かったが、男性が可能性や自由などの抽象的な印象を持っているのに比べて、女性はより具体性を持って、生活を中心に捉えている印象を受ける。

同様に、「日本はどんな国ですか。一言で言ってください」という質問を行なったが、結果は次のようであった。

(男性の回答)

- ① 住みにくい国 6 名 (12%)
- ② 狭い国 5 名 (10%)
- ③ 形式主義の国 4 名 (8%)
- ④ 心の狭い国 2 名 (4%)
- ⑤ 自分の国 2 名 (4%)
- ⑥ その他 (単一民族国家, 伝統的, 美しい, 独立心の乏しい, 貧しいなど) 6 名 (12%)

(女性の回答)

- ① 自分の国 8 名 (16%)
- ② 住みにくい国 6 名 (12%)
- ③ 狭い国 4 名 (8%)
- ④ 心の狭い国 2 名 (4%)
- ⑤ その他 (安全, 伝統的, 煙草を吸わない, 美しい, 差別のある) 5 名 (10%)

全体的に否定的な回答が目立つが、女性の方が日本を「自分の国」と強く意識している人が多かった。

上記の両国に対する印象に加えて、(1) 政治, (2) 経済, (3) 自然と環境, (4) 教育, (5) 衣食住などのライフスタイル, (6) 国民性, (7) 製品, (8) 文化, の 8 つの分野においてどのように感じているかを質問した。回答は、その内容から (1) 肯定的, (2) 否定的, (3) 中間的, (4) その他, の 4 つに分類された。

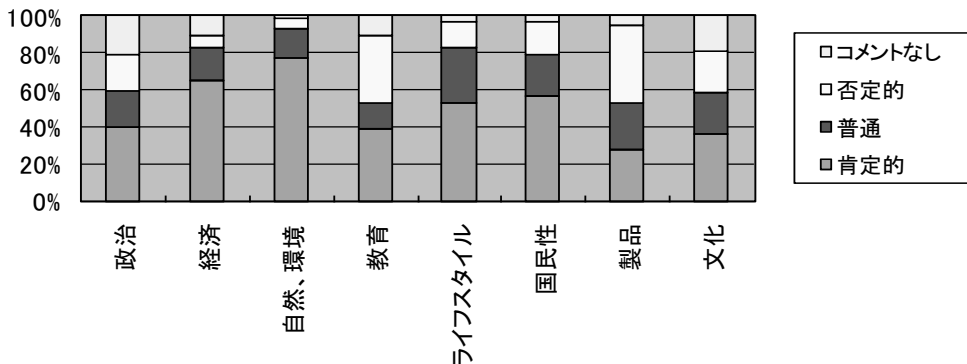


図 3 新一世のアメリカに関する意見, 印象

この結果によると、分野によって差はあるものの、全体的にアメリカに対して肯定的に捉えていると言えよう。

同じ分野に関して、日本在住の日本人に質問をしたところ、下記のような結果であった。

アメリカに住む「新一世」

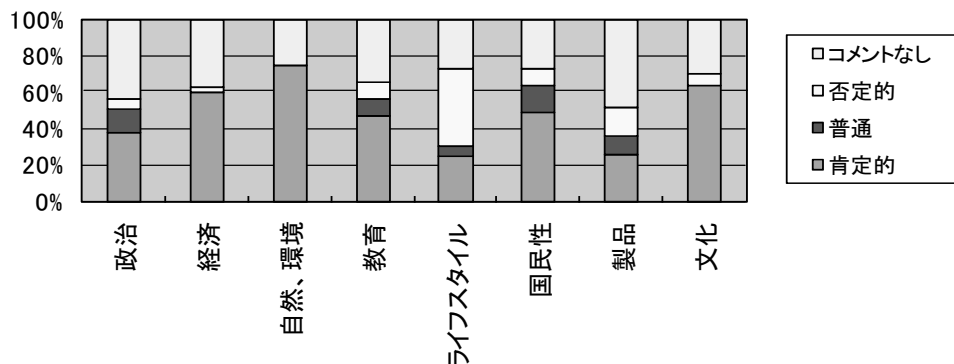


図4 日本人のアメリカに関する意見、印象

日本在住の日本人もアメリカに対して全体的に肯定的な印象を持っているようであったが、衣食住などのライフスタイルに対しては比較的否定的なイメージを抱いているようである。インタビューによると、メディアを通して受けるアメリカの治安面に対する不安が原因となっているようだ。実際アメリカに住んでいる日本人も何人かは同じ問題を挙げたが、日本在住の日本人ほど心配していないのが興味深い。

さらに、上記の同じ分野に関して日本についても回答を求めた。その結果は次のようであった。

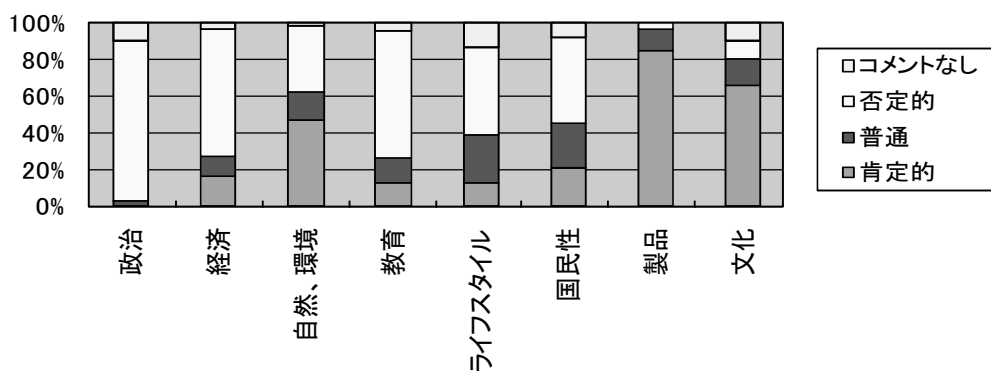


図5 新一世の日本に関する意見、印象

これを見ると、全体的に日本に対する印象は否定的ではあったが、日本製品と文化については比較的高く評価していた。反面、政治、経済、教育など社会の中核部分についてはかなり低く評価しているということが浮き彫りになっている。

更に、「新一世」に対して「日本の家族や友人が、あなたのアメリカ長期滞在をどのように感じていますか。」という質問をしたところ、「支持している」20名（40%）、「どちらでもない」10名（20%）、「うらやましがっている」9名（18%）、「仕方がないと感じている」6名（12%）、「反対している」5名（10%）、「心配している」3名（6%）、「どう思っているか分からない」3名（6%）、という結果であった（複数回答のため、回答合計は50以上である。）。インタビュー

で多くの人がは、やはり家族がアメリカの治安について心配をしていると述べていた。滞米者がアメリカでの生活に満足していても、身内がアメリカに住んでいることに対しての日本の家族の心情は複雑なようである。

4. まとめと考察

本調査の結果とその分析から、次のような点が調査のまとめとして挙げられる。

(1) 今回の調査の対象となったロサンゼルス「新一世」は、アメリカの地にあっても日本社会とその文化の影響の中で生活している場合が多かった。50名中24名が日本、あるいは日系企業に勤務し、そのうち21名が日本人の同僚や顧客を対象としている。36名は最低必要な英語は使えたと答えているが、実際の生活では日本人との交友の機会も多く、日本語を使用している場合も多いようである。

(2) (1) で観察されたように、「日本的」な生活様式を継続しながらも、日本にない土地や空間の豊かさ、自由などに代表されるアメリカ社会や生活そのものには満足しているようであった。反対に、多くが日本での生活は窮屈で、ストレスも多く、また成功への可能性が閉ざされていると感じるなど、日本社会に対しては否定的な印象を持っていた。

(3) 日本社会に対しては、必ずしも肯定的な印象を持っていないにも拘わらず、日本とのつながりや自分が「日本人」であることには誇りを持っていた。日本へも頻繁に行き来し、日本に関する情報も積極的に入手しているようであった。日本の文化や日本製品の価値も評価していた。アメリカの生活や社会に満足していても、日本国籍を保留している人が多いのも大きな特徴であった³⁾。

以上の点から、情報網や交通の発達でアメリカが時間的にも心理的にも近くなったせいか、ロサンゼルス「新一世」が、いわゆる「メインストリーム」と言われるアメリカ社会の中心的部分には溶け込むというよりは、日本人としての価値観や生活様式を保ちながらアメリカ生活を送るという、二つの社会をうまく融合させる生き方を選択している姿が垣間見られた。異文化に急激に遭遇した戦前の移民に比べて、「新一世」のアメリカ社会への溶け込み方は、自らの日本人としての文化的社会的フィルターで注意深くろ過された緩慢なものであるようであった。アメリカに対して好印象を持ち、アメリカに永住することを希望しながらも、アメリカ市民となってアメリカに「骨を埋める」という思いはあまりなく、いつでも日本に帰れるという安心感のためか日本国籍を保持している人が多いのがそれを顕著に表わしていると思う。

今回の調査はパイロット的に限られた人数からデータを収集し、分析したものであるため、そのデータや解釈に偏りがあった可能性は否定できない。この結果をより正しく検証するには、規模の大きい調査が必要である。また滞米期間と自意識の関係などのより踏み込んだ統計的分析も必要であると考えられる。

注

- 1) 職業別では、民間企業関係者が53,868人（その家族74,121人）、報道関係者698人（家族848人）、自由業関係者5,850人（家族5,687人）、留学生・研究者・教師68,647人（家族18,055人）、政府関係者1,883人（家族2,130人）となっている（外務省、2008、38－39）。
- 2) 抽出法は、身の回りの調査しやすい対象を調査する便宜的抽出法。
- 3) 現行の日本の法律では、二重国籍が認められないため、アメリカ市民権を取得すると、自動的に日本国籍を喪失する。

参考文献

- 東栄一郎：「グローバルに拡散する日本人・日系人の歴史とその多様性」編集 レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キムラ＝ヤノ、ジェイムス・A. ヒラバヤシ『日系人とグローバリゼーションー北米、南米、日本』2006.
- 外務省領事局政策課：『海外在留邦人数調査統計』、2008.
<http://www.mofa.go.jp/Mofaj/toko/tokei/hojin/08/pdfs/1.pdf>
- 田中景：「海外移住の歴史ーアメリカに渡った日本人ー」、2002.
<http://www.nicol.ac.jp/library/data/s3-2.pdf>
- Hosler, A. *Japanese Immigrant Entrepreneurs in New York City*. New York & London: Garland Publishing, Inc, 1998.
- Takahashi, J. *Nisei Sansei*. Philadelphia, PA: Temple University Press, 1998.
- Tsukuda, Y. “Future of the Nikkei Community between Japanese-speaking and English-speaking Nikkei” Abstract of Graduate Students in American Studies Programs, University of Tokyo, 2005.